

げんしょうがくてきしんりがく **現象学的心理学** Phenomenological Psychology(英),

**現象学的心理学**には、心理学が哲学から生を受け自立した歴史を映し、「哲学としての現象学的心理学」と「心理学としての現象学的心理学」とがあり、混同されやすい。

【**現象学的心理学(哲学としての)**】『現象学的心理学』(1925)を著わした、数学出身のフッサール Husserl, E. (1859-1938)は、『**経験的立場からの心理学**』(1874)のブレンターノ Brentano, F. (1838-1917)に学び、哲学としての現象学を創始した。『**ブリタニカ論文**』(1927)では、「**純粋な現象学的心理学**」を、「**純粋な自然科学**」に比すべき形相学として、**事実学としての「厳密な経験的心理学」**の基礎として、同時にまた、諸科学を基礎づける「**超越論的現象学**」の予備学として、位置づけた。現象学は、「**事象そのものへ**」(Zu den Sachen selbst!)を格律とし、自己・他者・共同社会の意識現象のノエマ(対象・内容)とノエシス(作用)の現象学的記述に基づき、**意識の志向性(Intentionality)**、**経験の地平構造**(図と地、主題と脈絡、焦点と周辺、内的地平と外的地平、などの構造)、**意識と覚知(awareness)**、**受動的総合**、**生きられた時間(lived-time)**、**空間**、**身体**、**世界などの意味と構造を解明 explication**する。解明と探究の基本方法には**現象記述(Phenomenal description)**、**現象学的還元(Phenomenological reduction)**、**想像自由変容(Imaginative free variation)**、**本質直観(Intuition of essences)**の段階がある。現象学の発展は、フッサールの「イデー」、ハイデガー Heidegger, M. の「**存在と時間**」、メルロ・ポンティ Merleau-Ponty, M. の「**知覚の現象学**」を始めとし、シェーラー Scheler, M.、サルトル Sartre, J.P.、ボーボワール Beauvoir, S.、リクール Ricoeur, P.、ガダマー Gadamer, H-G.、レヴィナス Levinas, E.、などによる多彩な業績を生んだ。現象学は、ディルタイ Dilthey, W. の**精神科学**、ヤスパース Jaspers, K.、ビンスワンガー Binswanger, L.、ボス Boss, M.、らの**精神病理学との交流を深め**(ベルク Berg, v. d. 『**人間ひとりひとり**』1976 参照)、インガルデン Ingarden, R. の**文学認識論**、シュッツ Schutz, A. の**社会学**、さらに、**宗教学**、**芸術学**、**歴史学**、**看護学**、**建築学**、**地理学**などに影響を与えた。

【**現象学的心理学(心理学としての)**】**心理学としての現象学的心理学**は、現象学哲学の方法と洞察に学び、「**厳密な経験的心理学**」を目指す**現代の心理学**であり、**解釈学**、**実存主義**、**精神病理学**、**文学**、**芸術**、**歴史学**などの諸学との親和性を保ち相互交流を希求する**人間科学としての心理学**である。**質的心理学**の一角を占め、**人間体験の「理解」**を求め、**科学的性格を確保しつつ**、「**出来事**、**心理的過程**、**個人的人格**」を主題として探究する(キーン Keen, E. 『**現象学的心理学**』1989)。**錯視**、**学習**、**思考**、**心理療法**、**不安**、**怒り**、**嫉妬**、**許し**、**読書**、**犯罪被害**、**強者と弱者**、などの**心理体験の意味と構造**を解明する。「**意識の流れ**」を説く**ジェームズ James, W. の『心理学原理』**(1890)は「**草の根**」現象学とされる。**ゲシュタルト心理学者カツツ Katz D.**、は、『**色世界の構造**』(1930)、『**触世界の構造**』(1925)の**実験現象学的研究**に「**偏見のない記述**」を活かした。**ナチス時代のドイツから米国に亡命したゲシュタルト心理学者たち**と、**米国の現象学心理学との関係は深い**。現象学的心理学を実証的「**科学研究**」の予備的研究とする立場と、**自立的な本格的**研究とする立場とは、**現在も並存している**。現代心理学界で**傍流少数派**とされる現象学的心理学者は、**主流派心理学**を目して、**歴史的には思弁的哲学と決別し**、**生理学**、**生物学**、**物理学**、**脳科学**、**情報科学**などとの親和性を保ち、**行動と経験の説明**、**予測と制御**を追求する、**実証主義的な「自然科学としての心理学」とみなす**。伝統的心理学と現象学的心理学の対比は、方法：

実験化と記述, 目的: 因果分析と同定, 思考: 計算的と思索的, 生活スタイル: 技術と棲み込み (dwelling)/理解, とも定式化される(Colaizzi, P. F., 1978)。自然科学と人間科学とのアプローチの基準の差異の対比を, 「(実験化)と(その他の研究様式)」, 「量と質」, 「測定と意味」, 「(分析・総合)と解明」, 「決定された反応と志向的応答」, 「(同一的反复)と(変容を通じての同一性)」, 「独立的観察者と参与的観察者」としたジオルジ, A. は、**現象学的心理学の方法を**, 経験的心理学の立場で, 現象学哲学の諸方法から再構成し, 「他者である参加者による素朴な経験記述の蒐集」, 「全体的意味の読み取り」, 「意味単位の決定」, 「参加者の自然的態度による表現から, 現象学的心理学的感受性による表現への転換」, 「不変な『意味と構造』の解明と表現」の諸段階に定式化した(Giorgi, A., *The Descriptive Phenomenological Psychological Method in Psychology*. 2009)。また, 「多様な諸研究における記述的資料の諸源泉」と「記述的諸方法」の間の諸対応に, 「記述的記録」と「プロトコル分析」, 「対話的面接」と「想像的傾聴」, 「生きられた出来事の観察」と「知覚的記述」, 「想像的現前」と「現象学的反省」, が指摘される(Colaizzi, P. F.)。さらに, 「第一人称科学としての心理学」(Gendlin, E., ジェンドリン, 2004)も提唱されている。現象学的心理学は, 子ども, 高齢者, 障害者, 精神病者, 異邦人など, 研究者自身とは異質な世界を生きる人間の体験への接近に優れている。現象学的心理学を初学者が学ぶ際の困難は, 現象学書が難解な点と, 体験者を対象者として外側から「外の眼」で見る通例の外在的見方から, 実在世界への自然的信念をいったん**判断停止**し, **括弧入れする現象学的還元**を経て, 主体としての体験者自身の内側から「内の眼」で見る内在的な見方へと, 見方の転換を求められる点にある。しかし, 実証主義的な客観的科学主義の立場は, それは主観的, 非客観的, 非科学的だ、と批判する。他方, 現象学的立場は, 科学的客観主義は反省不足で一面的だ、と批判する。そこに, 両者の間に, 誤解や無理解による対立や無視の可能性が生じる。ここで, 眼差しを, 内観で, 「内へ」向けるデイルタイ・ヤスパース型と, 「外へ」向けるフッサール・ビンスワンガー型の二つの型の現象学を混同しないことが重要だ、としたベルクの指摘は, 初学者への貴重な導きとなる。後者は, 俳句の詠み方にも似て, 我々が世界を観察するとき, 我々はそこに我々自身を見ているのだ、とする。現象学に学ぶ道は多様で, 実験心理学出身のジオルジは人間科学的心理学におけるフッサール現象学の実現を目指し, 現象学, 心理学, 科学の三者の合流領域をその研究の場と定める。教育実践出身のマネン Manen, M. v. (*Researching Lived Experiences*. 1997)は, 教育体験の研究に, 解釈学, 実存主義, ハイデガー存在論をいかす。**実存的現象学的心理学**に, カーム Kaam, A. v. , メイ May, R. , ジェンドリンの名は不可欠である。英語の**現象学的心理学誌**がある。→意識 →ゲシュタルト心理学 [吉田章宏]